

現存『とりかへばや』における男性達

——なぜ「涙」を流すのか——

野見山 優

一 はじめに

『とりかへばや』と呼ばれる作品は、かつては原作と改作が存在したが、現在は改作された『とりかへばや』（以下拙稿では現存『とりかへばや』と呼ぶ）、だけが残されている。両者は結末が異なることが、『無名草子』や『風葉和歌集』といった残された史料から明らかになっている。『とりかへばや』の作者は、古作、現存共に不明であるが、現存『とりかへばや』に関しては、辛島正雄氏が「『とりかへばや』と題されたにもかかわらず、男女きょうだいの描き方に極端な落差があることは、女に寄り添って物語ろうとする作者像を浮かび上がらせるのであり、それが男である可能性は乏しい」とするように女性の登場人物への描写の細かさから、作者を女性とする説が有力である。現存『とりかへばや』は、異性装のまま成長したきょうだいを中心とし、特に女君が苦悩を抱えながらも、最終的には本来の性に戻って帝の寵愛を受け、国母という女性として最上級の幸福を得る、栄華の物語として評価されている。しかし、女君の栄華は本人の意思に従った結末ということではなく、そこに至るまでには、女君と関係を持つ宰相中将や帝、帝と女君との伸を

取り持つ役目を果たす男君といった男性達の存在が必要不可欠である。

本研究では、男性達の行動によって物語が展開していくことに注目し、現存『とりかへばや』においての男性達の役割を考える。その際、物語が大団円で閉じていく中、最後まで嘆き続ける宰相中将が、特に重要な役割を担っていると考え、宰相中将の特徴とも言える涙の場面の表現の特色を中心に、帝や男君の人物像との比較を行い、現存『とりかへばや』においての男性達に迫りたい。なお、本文の引用、巻数、及び頁数は、国文学研究資料館蔵初雁文庫を底本とする『新編日本古典文学全集 住吉物語・とりかへばや物語』（小学館 二〇〇二年）を使用した。なお、引用文中の傍線・その他は全て私に付したものである。

二 宰相中将と女君

宰相中将は、古作『とりかへばや』と現存『とりかへばや』で大きく結末の変わった人物の一人である。『源氏物語』の和歌とその他の作り物語の和歌を番えた『物語二百番歌合』で女君に対し「内大臣の上」という語が用いられていることから、古作においては、

宰相中将（内大臣）は女君と最終的に結ばれたと推測されている。一方で、現存『とりかへばや』では、女君と四の君と関係を持った後、二人の間を交互に行き来し、その優柔不断な色好みの結果として女君を失ってしまう。また、女君と男君が秘密裏に本来の性に戻った後は、男君の斡旋で、吉野の中の君を正妻として迎えながらも、最後まで女君の失踪を嘆き、その姿を探し求めるのである。

従来、宰相中将を「烏譚者」と評価する研究が多かったが、それを否定したのが中島正二氏⁴⁾である。氏は前半部での宰相中将は女君に代わって「男の恋の物語」の主人公を代行しており、その色好みの願望の成就の後は、男君の権力下に置かれ、秘密保持に加担させられる、としている。また、宰相中将の主人公性に着目した安田真一氏⁵⁾は、宰相中将は「ことば」を尽くし女性達と親しくなってきたが、このような手段が男装を経験してきた女君には通用しないことを指摘している。これらの先行研究では、宰相中将を女君の相手役と位置づけているが、まずは女君と宰相中将の比較を行うことで、宰相中将にどのようなキャラクターが付されているのか考察していきたい。

宰相中将は式部卿宮の一人息子で、「人柄のいとあだなるに」と初登場の場面から表現されるなど、色好みな性格が特徴である。このようなキャラクター造形は、王朝物語における典型的な男性主人公を企図したものと見て良い。当初、宰相中将は女君と対になる存在として登場し、両者は度々並列して描かれている。

その年五節に、中院の行幸ありければ、みな人々小忌にて参る中に、宰相中将、権中納言の青摺、いとみじう見ゆ。宰相は

いとそそろかにををしくあざやかなるさまして、なまめかしうよしあり色めきたる気色、いとをかしう見ゆ。中納言は、はなばなど見れども見れども飽くまじう、にははしくこぼるばかりの愛敬似るものなきに、もてなし有様も、さは言へどなごやかにたをたをといとなつかしきほどの、人にこよなくすぐれて目もあやなるを、御方々の人々をかしと見るに、宮の宰相は、いささかも人のけはひする所はただにも過ぎず、必ず立ちどまりものなど言ふを、中納言は見る目に違ひて、宰相の行きもやらず滞りがちなるを後目に見おこせつつ過ぎぬるを……（巻一九六、一九七）

かやうに一目も見る人の、心をつけて待ち思さんところも人の聞き伝へんことも知らず聞こえごちかかあるあまたあれど、人のほど軽らかならずいとをかしかりぬべければ情けなからぬほどに折々言ひ交はし、さらぬかきませのほどは知らず顔にて聞き過ごし、いとこよなくもの遠くもてをさめたまへるを、玉の瑕と飽かぬことに思ふ人々あり。この宰相の、あまり過ぐさずたづね寄り言ひかかりうかがひ歩くを、をかしと思ふ人多かりり。（巻一九九）

右記の二場面からは、作者が女君と宰相中将を対照的に配置している意図が見えてくる。外見面では、宰相中将へ「ををしく」と男性的な表現が使われているのに対し、女君には「たをたを」と、女性的な言葉が用いられている。女君の持つ本質的な女性らしさが、宰相中将と並ぶことで浮き彫りになる。また、内面に關して、周囲の

人々が女君の硬派な性格を「玉に瑕」と評すのに対し、宰相中将の色好みの性格は、「をかし」と好意的に捉えている。宰相中将の登場によって、完璧な貴公子と思われていた女君の性格に欠陥があることを暗示させているのである。

三 宰相中将の「涙」

宰相中将を、周囲が好意的に捉えてしまうのには、宰相中将の大きな特徴の一つである涙もろさが関係する。特に、女性を口説く際に涙を流すことが多く、「ことば」を尽くすと共に涙すること、過剰なまでの相手への執着を表現し、その姿に女性達は好意を抱いていく。宰相中将に限らず、帝や男君も涙を流すが、その回数、宰相中将が四六回、帝が七回、男君が女装時を含めて七回、と圧倒的に宰相中将が多い。

次に掲げる表は、宰相中将の涙の対象となった相手を巻ごとに整理したものである。複数の相手に向けられた涙である場合、そのどちらにも含めてカウントしている。

人物	巻一	巻二	巻三	巻四
女君	一回	一一回	七回	六回
男君	三回	四回	〇回	〇回
四の君	八回	二回	四回	一回

※男君は巻一・二では女装姿
(他・吉野の姉妹…一回)

巻一では四の君、巻二では女君とその巻で逢瀬の相手となった女性に向けての涙が多い。しかし、最後に妻となる吉野の妹宮とは、逢

瀬の場面がありながらも涙を多く流すようなことが無く、また巻三で、同じように通っていたはずの女君と四の君とを比較すると、回数として倍以上の差があり、やはり主人公である女君の視座から描かれた作品であることがこの表から読み取ることができる。

では、次に実際にどのような場合に涙を流しているのか表現を見ていく。まずは、逢瀬を重ねる四の君と宰相中将からである。

ほのかなる行きあひの折々、現し心もなきまで泣き惑ひ焦らるるさま、なまめかしうあはれげなるも、度重なれば見知られたまはずもあらず。(巻一 一一六)

最初は、宰相中将からの度々のアプローチを受け入れることになった四の君も、回数を重ねるうちに、心が揺らいでいき、涙を流す宰相中将の姿を見て、次第に身を任せるようになる。宰相中将にとって四の君との逢瀬は念願であり、彼女はどうしても手に入れた相手であった。「現し心」を失うほど泣き惑う姿は、宰相中将の過剰なまでの愛情をよく表現している。

次に見るのが女君との逢瀬である。先ほど挙げた場面での女君は、あくまで男としての役割を持ちながらも、宰相中将の涙に対して、本来の女性としての同情心が動かされたと言っても良いだろう。

では、実際に自分が逢瀬の対象になった際にはどうだろうか。最初は宰相中将に冷たく当たって凌いでいた女君であったが、その心境が変化する場面がある。

気色をだに知られではひ隠れ、ひとりながめたまひけるほどの

つらさを言ひやらず、「かうのみつらき御心ならば、さらに
えあるまじうなん思ひなりゆく」と言ひ尽くしつ、いと心や
すき所なれば、うち重ねて臥し、よろづに泣きみ笑ひみ言ひ尽
くす言の葉、まねびやらん方なし。(巻二 一一八七)

女性であるという秘密が発覚した後、月の障りのため乳母の家で
隠れている女君を宰相中将が探し出して言い寄る。これまでとは違
い誰にも見られることのない場所で対面したことで、女君も宰相中
将を受け入れている。この時の女君は女として宰相中将を受け入れ
互いに涙を見せている。後に、妊娠し女姿となった女君に対し、

もてなし有様はればれしく馴らひたまひにしかば、いとあへか
に埋もれいぶせくはなく、わららかにをかしく、いと馴れたる
心つきて、ものを思ひ嘆きてもひとへに思ひ沈みてはあらず、
泣くべき折はうち泣き、をかしく言ひたはぶる折はうち笑ひ、
言はん方なくにくからず愛敬づきたまへる人の……(巻三 三
六〇)

という記述があるように、女君と宰相中将は互いに心情を分かり合
う関係なのだろう。初めて心の通じ合った場面でも互いに泣き笑い
する様子が描かれていることで、二人の関係が、他の女性と宰相中
将との関係とは異なっていることは明らかである。

女君や四の君といった高貴な女性たちは、最初からその涙に心動
かされるわけではなく、困惑や拒絶を経て、宰相中将の情熱を受け
入れるようになっていく。

では、その様子を見てきた女房達はどうに思っていたのだろ
うか。四の君の乳母子の左衛門とのやり取りから探っていこう。

逢う人にも飽かぬ夜を、まいてはかなう明けぬなり。左衛門
焦られわぶれば、出でぬべき心地もせねど、さりとてあるべき
ならねば泣く泣く心の限りたのため契りて出でたまふ心地、夢の
やうなり。(巻一 一一〇八)

左衛門がもとは、日に千度、みくらの山の所なきまで書き尽
くしたまふを、若やかにもの深からぬ心には、えも言はずあて
になまめきたる気色して命も絶えぬばかり泣きわびたまひし暁
を、いとあさからず心苦しと見たてまつりにし心の染みにしか
ば、御文の隙なき言の葉などあはれにかなしげなるも、いとほ
しく放ちがたく色めきたる心には思へれば、いと夢のやうなる
ことの後、そのままにいみじく思し入らせたまひて御心地例な
らずものしたまへば、殿の隙なく添ひおはして、かひなきまで
も、えこの御文を引き出でぬよしを、同じさまに書きおこす。

(巻一 一一一〇)

左衛門は宰相中将を四の君のもとに導く役目を持つ女房である。最
も四の君に近いところで仕えてきた左衛門は、まだ若く思慮が浅い
ため、宰相中将の情熱に心を動かされてしまう。秘密の逢瀬のため
の協力者として、二人の仲を取り持つ重要な人物の左衛門だが、周
囲の人々と同様に、宰相中将に好感を抱いていた。当時、女性との
関係を取り持つような女房との間にも関係を持つということが一般

化しており、宰相中将と左衛門との間にも肉体関係があったと見ることも可能である。

左衛門と同様、女性との逢瀬の架け橋として関係を持った女房に宰相の君がいる。宰相の君は女装の男君に仕える女房である。四の君との関係がうまくいくようになると、宰相中将の興味は男君に移るのだが、四の君に物足りなさを感じた宰相中将が実際に男君へ迫る場面で、宰相の君を口説いていたことが明らかとなる。

なほ宣耀殿の尚侍はしも限りなくをかしくて、人に心おかるる振る舞ひは思ひのどめられなんかしと、なほ思ひなされて、またたち返り宰相の君といふ人を泣く泣く語らひ尽くして、いかなる紛れにありけん、御物忌固うて梨壺にもまうのほりたまはぬ夜、入りにけり。(巻二 二六六)

涙ながらに宰相の君と「語らひ尽くし」た結果、宰相中将は男君のもとに忍び込むことに成功しているのである、宰相中将の涙には女房達の心を動かす効果があるといえる。

また、女君を失った直後の宰相中将の涙と、それに対する女性の反応も非常に印象的なものである。

さらにたとへて言はん方なく、胸よりあまる心地して、人の色がましと見思はんこともたどられず、足摺りといふらんこともしつべく、泣きてもあまる心地して沈み臥したまひぬる御気色の、いみじくいとほしくわりなきを、見たてまつり嘆かる。

(巻三 三九三)

この場面では、女君の失踪を知った宰相中将が取り乱して泣くさまを女房達の目線で描いている。もはや涙だけでは表現できない宰相中将の深い悲しみを描いた印象的な場面だ。

ここで着目すべきは「見たてまつり嘆かる」という女房の描写である。これ以前の場面で宰相中将の周辺でこのようなギャラリイとしての女房の姿が描かれたことはなく、「見たてまつり嘆く女房の姿には作者や想定される読者層の女房達が重ねあわされている。ここまで、宰相中将の涙を見てきたが、その中で、彼の涙に対し、同情的になる女性の姿がたびたび描かれてきた。素っ気ない女君と反対に、社交的な性格の宰相中将は、情のこもった涙によって女性を絆していく。作者は、宰相中将に対してどこか憎めないキャラクターを用意し、作中でも悪者にならないよう、宰相中将の涙を繰り返し描いたのではないだろうか。

四 「色好み」から「まめ」へ

念願であった女君と契ることとなった宰相中将だったが、女君を失い、きょうだいの「とりかへ」が起こつて以降は、自身の色好みな性格を省みるようになる。男君と改めて夫婦関係を結んだ四の君のもとに、宰相中将は全く通わなくなり、それに対し左衛門は「あやしくめやすくもなりにける御心」と感じる。色好みを反省した宰相中将に対し、左衛門が皮肉な眼差しを向けていることが印象的である。現存「とりかへばや」には、全編に渡って登場するような女房が左衛門以外に登場せず、このような左衛門の視点は、読者である女房の視点に沿っているものとして着目すべきだろう。この場面

では、宰相中将に対して違和感を持っていた左衛門も、後に、宰相中将が四の君との面会を頼み込んだ際には、男君を評価するような言葉の口になっている。彼女の思慮の浅い心が作中での周囲の評価と一体なのであれば、前半で宰相中将の色好みに好感を持っていた女房達も、後半では左衛門同様に男君に靡いているとも読み取れる。これまで影の薄かった男君が物語を動かすようになると、宰相中将の「色好み」としての存在感が薄らいでいく。

このような宰相中将に対して、作中では「まめ」という語が用いられるようになる。

思ひわび、心地もほげほげしく、出でて交じらひ歩くにつけてももののみかなしければ、昔隈なかりし御心も名残なくまめになりて、右の大臣わたり跡絶え果ててのみもてなしたまふも、あながちにありしやうにのみ焦られわびたまはず……（巻四 四六七、四六八）

ここでは、四の君に関心がなくなった原因が彼自身の性格の変化だと描かれる。その直後の場面で前述のように、四の君との対面を頼むが、それも叶わず、彼は色好みの相手を完全に失ってしまうのだ。その宰相中将に対して、画策を練るのが男君である。

吉野山の中の君の御こといと心苦しういかにもてなさましと思すを、この人の今は逢ひての恋も逢はぬ嘆きもうち忘れてをささうち乱ることもなくてまめだち歩くめるにや許してまし……（巻四 四七五）

宰相中将が「まめ」に変化したことに男君も気が付き、自分の妻の妹である吉野の中の君を宰相中将に紹介する。吉野の中の君は、非常に聡明な女性であり、宰相中将から女君について問われた際も上手く言い包めている。彼女の存在によって宰相中将は救われ、女君のことを必要以上に詮索することはなくなっていく。そのおかげで女君の秘密は保持され、無事に物語が幕を閉じる。「色好み」で執念深かった宰相中将が「まめ」になり、吉野の中の君のような女性と結ばれたことで、きょうだいへの過度な干渉がなくなっていく。宰相中将の性格の変化は、物語が大団円を迎えるにあたって必要な要素であった。しかし、物語後半で彼を支える吉野の中の君も元々は、男君によって用意された女性であり、前半部で物語を動かしてきた宰相中将が、今度は男君に動かされていくのである。まずはこの点に注意しておきたい。

五 恋する帝

宰相中将が大団円の中で一人不幸を担われた男性であれば、その逆の役割を持つのが帝である。帝は、男君の仲介によって、男装を解いた女君と最終的に結ばれる。前半部では殆ど登場することのなかった帝が最終的に主人公と結ばれる展開となったのは、女君を国母とするためであり、帝は現存『とりかへばや』の作者が生み出したキャラクターだろう。

帝と女君との逢瀬は一方的に帝が関係を迫る形で実現する。当初女君は、強引に迫って来る男に対して、「あさましと驚かれて、異人とは思し寄らず、中納言のうかがひて尋ね来にけると思すに」とあるように宰相中将だと勘違いする。その後「年ごろ思ひし心の中、

大臣のあなたがちに辞びし恨めしき春宮の御悩みの折ほのかに見そめてしことなど、泣く泣く言ひ続けさせ給ふに」と泣きながらこれまでの思いを語る様子で、帝だと初めて気が付くのである。帝の女君に対しての行動は、どこか宰相中将と重なって見える。帝はその登場回数少なさもあって、涙の場面は右記以外には一箇所しかない。

「あが君、かくな思しそ。さるべきにこそあらめ。ただ同じ心にだにあひ思さは、よも御ためかたはなることあらじ」と泣く泣く聞えさせたまふさま、まねびやるべき方なし。(巻四 四 五〇)

帝が女君に「あが君」と情熱的に呼びかける様は、宰相中将と女君の逢瀬を連想させ、帝と宰相中将の類似性が見えてくる。

宰相中将と帝が最も重なって見える箇所は和歌を贈る場面である。

帝→女君

「三瀬川後の逢瀬は知らねども来ん世をかねて契りつるかなこの世ひとつの契りはなほあさき心地するを、いかがあらんと思ふなん口惜しき」とのたまはするままに、ほろほろと続きぬる涙に、いとど聞こえ出でん言の葉もおほえず、いみじうつつましけれど、「なほ一言聞かでは、えなん出づまじき」とやすらはせたまふも、いとわりければ……(巻四 四五二)

宰相中将→四の君

「わがためにえに深ければ三瀬川後の逢瀬も誰かたづねん

なほ思し知らぬこそかひなけれ」と言へど、答へもせず。左衛門にいみじきことども語らひて、たち帰りても、夢かとだにえ思ひ分かず、よよと泣かれぬ。(巻一 二〇八、二〇九)

女性は死後、初めて契った相手に背負われて三瀬川(三途の川)を渡るといふ俗信を踏まえて詠まれた和歌であるが、同じ「三瀬川」を詠みながらも、状況は全く異なる。帝は男性の噂のなかった女君が処女ではなかったことを知り、自分の他に背負って三瀬川を渡ってくれる相手がいるのだ、と軽い皮肉を込めて詠みかける。一方の宰相中将は夫がいるはずの四の君が処女であったことに驚くと共に、二人の縁の深さを感じをもつて詠んでいる。女性に対する正反対ともいえる違和感を同じ俗信を用いて語るのは、作者の意図したところだろう。また、この場面でも帝は宰相中将のように涙を流しており、帝の人物像は宰相中将を基にして作られたと言って良いのではないだろうか。

女君を栄華に導くために作られた登場人物である帝が宰相中将と似たキャラクターなのはなぜか。そこに作者の意向があると考ええる。

帝は改作によって登場した人物であり、現存『とりかへばや』の作者は、帝と宰相中将を意識的に重ねることで宰相中将の存在を際立たせている。帝は、宰相中将と似てはいるものの、女君の秘密に必要以上に固執することはなく、初めて契った相手が宰相中将だと勘付いた後も寛容な態度を取っている。宰相中将が失ってしまった情熱や強引さを帝はそのまま受け継ぎ、女君を栄華に導くが、その陰で宰相中将は女君の不在を嘆き続けるのである。作者が宰相中将をこの物語のキーパーソンと考えていたことは明らかである。しか

し、帝と女君の伸を直接取り持ったのは男君であり、帝も男君によって動かされていたことになる。後半部においては男君が物語を動かす役割を担わされており、彼によって女君の栄華は決定的なものになったと言つて良い。

六 男君

今まで述べたように、男君は後半部で男姿に戻つて以降、その存在感を増していく。男君の存在について、西本寮子氏⁶⁾は男君が本来の性に戻つて以降の行動の原理は女君のためであるとし、「男尚待は女中納言が自然に円滑に女姿をとり戻すために置かれた存在ではない」と言及し、異性装時代にその苦悩が描かれなればかりか、女東宮と早々に関係を持ち、男性としての本質を露にしているため、そもそも女装の必然性すらなく、「とりかへ」後の女君が女性として生きていく場所の提供と、きょうだい愛の提示のために作られているとの結論に至っている。

西本氏の論に従えば、男君も前述の帝同様、現存『とりかへばや』の作者が新しくキャラクターを付した人物とも考えられる。女装時代の男君は、仕えている女東宮に対し当初から男性としての本質を明らかにしており、その後の「とりかへ」も、女君ほど大きな意味をなしていないかつたとも言える。男性として生きることとなつた男君の特徴を宰相中将・帝同様、涙の場面から考えてみたい。

男君は、きょうだいの「とりかへ」以後、女君から引き継いだ女性達など、何人かと関係を持つが、その中で彼が涙を流す相手は女東宮だけである。次の場面は、男君が妊娠した女東宮との対面の場面である。

暮れぬるにぞ、大将参りたまひて、督の君の対面したまへば、忍びて、宮の御有様、官旨の憂へつることども、聞こえしさまなどのたまへば、大将もうち泣きたまひて、宵など過ぐるほどに、人静まりぬるにぞ、いとよくまぎらはして宮に対面せさせたまつりたまへる。…(中略)…これほどの有様をとまかくも人に譲らず見披ひたまふべかりけるを、たとしへなく心憂きさまを見たまへ捨ててけるよと、人の御つらさも、身の心憂く恥づかしさもつくづくと思ほし知られて、涙のみこぼれて御答へものたまはせぬを、しか思さるるにこそとことわりにあはれて、日ごろの怠りなど泣く泣く聞えたまへど、聞き入れたまふべうもあらず。(巻四 四二七、四二八)

男君にとつて女東宮は初めて自らの意思によって関係を持った人物で、自分の女装時代も知っている相手である。男君は、女東宮にのみ「とりかへ」の真実も聞かせており、その点でも当事者以外で真実を知る唯一の女性である。女東宮の前での男君は冷淡になりきれない部分が見られ、他の男性達のように涙を流す。これに対して女東宮は、妊娠中に自分を放置した男君に対し「人の心の思はずに恨めしきに」と思っており、そのすれ違いは宰相中将と女君の関係にも共通する部分である。

しかし、一方で、男君は、宰相中将とは全く逆の性格を持つている。女東宮と対面し、涙を流したすぐ後の場面を見てみよう。

吉野の女君右の大臣のなごばかりはえおほえたまはねど、年ごろのあはれなどあさくしもあらねば、その後もさりぬべき

隙々には、督の君いとよくまぎらはして対面せさせたてまつり
たまふ。(巻四 四三〇)

先ほどまでは、涙ながらに女東宮に思いの丈を訴えかけていた男
君であるが、その場面を冷静に分析し、これまで関係を持ってきた
女性たちとの比較を行っており、直前に女東宮へ涙を見せた姿とは、
別人のようなこの冷静さが、男君の大きな特徴である。

男君は栄華を極めていく中で自身の邸宅を建造することとなり、
吉野の姉君を正式に呼び寄せるのだが、この時、吉野の姉君、四の
君、女東宮に対する評価が決定的なものとして描かれる。吉野の姉
君には「ただよしあり、心にくくおくゆかし、あてになまめかし
くけだかくなどある方こそ似るものなけれ」、四の君に対しても「一
筋に子めきらうたげに心苦しきさまは、これになずらふべき人あり
がたくや」などと、非常に評価が高いことがわかる。一方で、特別
な相手であるはずの女東宮の評価は、「ただひたぶるにあてなるよ
り外のことはなく」と随分と低いものになっている。このように思
いを巡らせる自分自身について、男君は「御心のうちぞ恥づかしか
りける」ときまりの悪さを感じており、本人も自分の多情さに自覚
的であることが分かる一文である。宰相中将はその時々で衝動的に
女性達の間を行き来していたが、男君は女性に対し優先順位をはっ
きりとさせている。男君の女性評が繰り返し描かれるのは、彼の多
情さを宰相中将のような衝動から来る情熱的な多情さとは異なるこ
とを読者に印象付けるためだと考える。このような冷静さを持つて
いたために、男君は栄華を極めることが出来たのである。

七 おわりに

現存『とりかへばや』は、一見すると女性の栄華の物語であるが、
女君は、父の左大臣によって男装のまま出仕することを決定づけら
れる。次に、宰相中将によって妊娠することとなり、女姿に戻る。
その後は、男君の協力の下、帝と結ばれ、国母となる結末を迎える。
こうしてみると、女君は、物語の主人公ではあるものの、男性たち
によって振り回されているように見える。女君にとつて栄華を極
めることは個人の幸福とイコールではない。実際、帝との逢瀬に、
彼女が満足しているような描写は存在しておらず、女君の迎えた結
末は家の繁栄としての幸福でしかなく、女君個人の幸福ではない。
現存『とりかへばや』の最後の場面は、「ひとかたならずかなしと
や」という宰相中将の嘆きで閉じられており、作者が宰相中将に重
要な役割を付していたことが分かる。事実、宰相中将は、前半部で
主に物語を動かすキーマンであり、その性格は、涙もろく情熱的な
「色好み」。感情豊かなその様子は、周囲から好感を持たれていた。
女君の失踪の後、宰相中将は「まめ」な性格となり、宰相中将がも
ともと持っていた情熱的な性格を帝が受け継ぎ、「色好み」な部分
は男君が持つようになる。

現存『とりかへばや』で、女君と深く関わる男性達の性格は、宰
相中将の性格を基にしていると考えても良いだろう。古作では女君
と結ばれた宰相中将は、改作される際に女君を失い、女君への愛情
が空回りしている様子が描かれるようになった。後半部、物語が大
きく動き、宰相中将の性格をそれぞれ受け継いだ帝と男君が活躍し
始めると、宰相中将は物語からフェードアウトしていく。そうであ

りながら最後に宰相中将の嘆きで結ばれていることは、大団円に見えた結末が実は不完全なものであることを示唆しているのではないだろうか。

現存『とりかへばや』において、男性達を中心に研究した論はこれまであまり見られなかった。今回の研究で、作者が男性達のキャラクターを作り上げる際に、宰相中将像を基本とし、それを受け継いだ形で男君・帝を造型したのではないか、という結論に辿り着いた。現存『とりかへばや』の主人公が女君であることは揺るがないが、実際に物語を動かしているのは男性達であり、特に宰相中将は、男性達に共通する性格を多く持ち、人物造型の中心に置かれている。本稿では作品内での人物造型の比較検討にとどまったが、宰相中将を中心とした男性達の人物像を『源氏物語』や『夜の寝覚』など先行する物語との比較から明らかにすることを今後の課題としたい。

参考文献

注(1) 辛島正雄・森下純昭『「今とりかへばや」の定位』(新日本古典文学大

系『埴中納言物語・とりかへばや物語』岩波書店 一九九二年)

(2) 登場人物の呼び名は一貫して左大臣家のきょうだいを女君と男君、その他の人物を宰相中将、帝、四の君、女東宮とする。

(3) 宰相中将を「鳥譚者」として注目した論文では、岡本美奈「栄華の物語を支える「鳥譚者」―『とりかへばや物語』の宰相中将―」(『表現と創造』No.5 二〇〇四年三月) 家井美千代「『今とりかへばや』の滑稽やう(こま)」(『Artes Liberales』七二号 二〇〇三年六月) などがある。

(4) 中島正二「『とりかへばや』の宰相中将に関する若干の考察」(『中世王朝物語の新研究―物語の変容を考える』新典社 二〇〇七年)

(5) 安田真一「『とりかへばや』宰相中将試論―欲望・恋情・焦り―」(『古

代文学研究 第二次』九号 二〇〇〇年十月)

(6) 西本寮子「『とりかへばや物語』の主人公―女性としての成長を軸として―」(『国文学攷』九八号 一九八三年六月)